

ASIS 1972 Annual Meeting

青 木 精 二†

第 35 回の American Society for Information Science (ASIS) Annual Meeting が昨年 10 月 22 日～26 日にワシントンのショーハムホテルで開催された。この報告をする前に ASIS について簡単に紹介しておく。

ASIS は情報科学に関する研究、出版、教育などを目的とする学会で、理論的な面と実面的な面から情報科学に関するいろいろな技術の発展に貢献しているとするものである。ASIS の母体は 1937 年に設立された American Documentation Institute (ADI) であり、1968 年に現在の ASIS に名称変更された。初期の頃はライブラリアンを中心としたドキュメンテーション活動が主であったようであるが、電子計算機を使用している情報検索の発展とともに、情報の収集、索引化、分類、蓄積、検索、配布などの情報検索（主として文献検索）の技術全般にわたる活動もなされている。

ASIS は現在約 3500 名の会員を有し、次のような 15 の Special Interest Group (SIG) を持っている。

Arts and Humanities (AH)
Automated Language Processing (ALP)
Behavioral and Social Sciences (BSS)
Biological & Chemical Information Systems (BC)
Classification Research (CR)
Costs, Budgeting, & Economics (CBE)
Education for Information Science (ES)
Foundations of Information Science (FIS)
Information Analysis Centers (IAC)
Library Automation & Networks (LA)
Non-Print Media (NPM)
Reprographic Technology (RT)
Selective Dissemination of Information (SDI)
Technology, Information, and Society (TIS)
User On-line Interaction (UOI)

ASIS の定期刊行物としては、隔月刊の論文誌 *Journal of the American Society for Information Science* (1969 年までは *American Documentation* といって季刊であった) がある。年刊のものとしては、

Annual Review of Information Science and Technology が 1966 年から刊行されている。これは前年に発表された情報科学に関する論文をいくつかの分野ごとにまとめて紹介しているもので、1971 年までは編集に参加するのみであったが、昨年から ASIS 自身が刊行するようになった。このほかに *Annual Meeting of the Proceedings* があり、1964 年より *Proceedings of the ASIS* (1967 年までは *ADI Annual Meeting* として出版されている。

さて、昨年の *Annual Meeting* であるが、全体を通してのテーマは *A World of Information* であり、各国の情報科学の状況、各国間の情報ネットワーク、文献などに関するデータベース（文献などに関する情報を磁気テープなどの形にしたもの）の国際的な利用など、国際間での情報の利用を推進していく上での問題点の議論が中心であり、テクニカルセッションはすべて招待講演であった。この点は募集した論文の発表が中心になっていた例年の *Annual Meeting* とは異なっていた。このようなテーマがとり上げられた背景としては、計算機と遠隔端末装置とが衛星や電話回線により結ばれるようになってきていること、機械による読取可能な形で大きな情報のファイルがデータベースとして用意されてきていること、情報検索のためのソフトウェアもいろいろな形のもので用意され、システムとして稼動していることなどがあげられる。テクニカルセッションの概要は次の通りであった。

1. 開発途上にある国際的な情報システム

International Atomic Energy Agency の原子力の分野における INIS、国連の食糧農業機構の農業の分野における AGRIS、ユネスコの事業として進められている世界情報システム (UNISIST) 計画などの現況の把握。

2. 議会のための情報システム

立法過程で正確、妥当なデータを把握し、意思決定に役立たせるための、立法府に対する情報サービスについての日本、西独、イタリア、英国の状況の報告。

3. 図書館と国際的な情報交換

情報システムに対する図書館の役割についての検討。

† 日本ユニバック総合研究所

4. 米国で作られるデータベースの国際的な利用
米国では現在、文献などの抄録作成や索引づけのサービスが数多くなされ、磁気テープなどの形で提供されているが、米国外におけるその利用状況の把握。

5. 情報科学の教育と研究

特に国際的な情報システムにおける問題の検討。

6. 技術面から見た国際的情報システム

衛星の問題、European Space Research Organization (ESRO) の SDS システム（ヨーロッパ各国の科学技術者が端末装置を通して直接データファイルをアクセスできるようにすることを目標にしている）における問題などの検討。

7. 国際的な情報の流通に影響を及ぼす社会的、政治的、経済的要因

各国間の貿易関係、技術情報の機密の問題などについての検討。

この Meeting と同時に開催されていた展示では今

回のテーマの背景を実際に示すべく、通信回線を用いたのオンライン情報検索の実演が中心であり、中でも Lockheed Missile and Space Company, Inc. の開発した Dialog というシステムは Lockheed 自身による実演のほかに、Atomic Energy Commission (AEC) の AEC/RECON と前述の ESRO のシステムで使用され、実演していたのが目を引いた。特に ESRO のものはインテルサット 4 号を使って西独の Darmstadt にあるデータベースをアクセスしていた。このほかに IBM が STAIRS でオンライン検索をやっていた。Dialog はあらかじめ文献につけられた索引にもとづいて検索されるのに対し、STAIRS は free-text システムで文献レコード全体が検索の対象となる点が異なっている。検索の対象となるデータベースとしては、磁気テープなどの形で一般に提供されているものを中心に 10 種類くらいが使用されていた。

(昭和48年1月12日受付)